

「新しい生き方」エフェソ 4：25－29 木村一充牧師

新しい月、8月になりました。広島、長崎という二度の原爆被災を経験したわが国にとって、今年は戦後 80 年という節目の年になります。ただ、目を世界に向けると、ロシアによるウクライナ侵攻やイスラエルによるガザ地区やシリアへの攻撃が今なお続くなど、先の見えない暗い時代の中に、私どもは置かれています。先の参議院議員選挙でも、憲法 9 条の改正を訴えた政党や、日本人ファーストを唱え、外国人の移民や選挙権を制限することを公約としてかかげた政党が、とくに若い世代から支持され、議席を大きく伸ばしました。戦後 80 年という時が流れ、日本人も世界の人も 20 世紀に起きた二つの世界大戦を、すっかり忘れてしまい、自分たちの国のことしか考えなくなってしまった。自分たちさえよければほかはどうなってもよいと考える風潮が、今や世界中を支配するようになったのではないかと、深く憂慮するのであります。

そのような中で、この国と世界の平和のために思いを馳せ、キリスト者として平和とどう向き合うかを、聖書の言葉から聞きたいと思えます。この朝のテキストとして、エフェソの信徒への手紙を選ばせて頂きました。その理由は、このエフェソの信徒の手紙の 2 章に、「キリストがわたしたちの平和である」というみ言葉があるからです。この手紙のあて先は小アジアの第一の港町であったエフェソです。エフェソは古くからギリシャ人の植民都市として栄え、アジア州の首都として東西貿易の要としての役割を果たしました。そのエフェソにパウロは教会を立てました。そこの信徒たちは、大部分が非ユダヤ人、つまり異邦人でありました。パウロが回心をする前、ファリサイ派のユダヤ人として教会を迫害していた頃、エルサレムの原始教会は大部分がユダヤ人キリスト者でした。やがて、ギリシャ語を話すユダヤ人たちが信仰者の群れの中に加わり、彼らが異邦人伝道の担い手となって福音を伝えました。教会は、徐々に異邦人信徒の数が増えていった。やがて、とうとう異邦人キリスト者のほうが、ユダヤ人キリスト者よりも人数的に上回るようになりました。しかし、このような勢力の逆転が進むなかで、ユダヤ人と異邦人とのあつれきや対立が深まることになります。ユダヤ人は、神に選ばれた民として律法の定めに従って、信仰生活を守りました。しかし、キリスト教はその律法から解放され、人種や民族、社会的身分や性別などに関係なく、ただイエス・キリストを信じる信仰によって救われると説きました。律法の定めには従わなかった。ユダヤ人にはそれが我慢できなかった。教会の中に、ユダヤ人と異邦人との齟齬、対立がそのまま持ち込まれていたのであります。

初代教会には、このような民族間の対立やあつれきがありました。しかし、それは現代に生きるわれわれにも当てはまることです。自分とは意見の違う人との対立、異なるグループ間の争いや互いの価値観の違いによって意見が衝突することがわれわれにもあります。しかし、この手紙でパウロは、「キリストは敵意という隔ての壁を取り壊してくださった」と書きます。人と人とを隔てる壁は「敵意」という壁だと、聖書は言うのです。この敵意こそ、国と国、人と人を隔てる固い壁、コンクリートのブロックです。1989 年秋にベルリンの壁が壊され、東ドイツから西ドイツへと人々が障壁なしに行き来することができるようになった。それまでに 28 年の年月がかかりました。それほど、自分が正しいと言い張り、相手を許さない。人間はそれほど我が強い存在だということではないでしょうか。この人間を悩ませ、苦しめる「敵意」という隔ての壁は、私どもの力では容易に取り除くことはできません。明治期から大正期にかけて活躍した教会の指導者に、植村正久という牧師がおりました。この人は、ある日の説教で「自分はこの年になっても人を赦すことができない」と言ってしばらくの間絶句し、講壇のうえで黙ったまま、次の言葉を語れなくなったことがあったといえます。植村牧師でさえ、人を赦し敵意を捨て去ることができずに苦しんだのです。しかし、わたしたちの教会の主であるイエス・キリストは、十字架を通して、両者を一つの体として神と和解させたとパウロは言う。キリストが十字架で死んでくださったことで、私も、あなたも、すべての人が神と和解することができた。共に神と和解する恵みを頂いたので、共に新しくされて一つの体、ひとつの教会になることができると聖書は言うのです。

7 月最後の土曜日の夜、NHK の番組で『プロジェクト X』というドキュメンタリー番組を見ました。『はだしのゲン』という漫画、中沢啓二という作者が広島での自らの被爆体験をゲンという男の子を主人公にして描き、ゲンがその体験を乗り越えて、希望をもって強く生きてゆこうとする姿を描いたあの漫画を、アメリカ人にも読んでもらおうと、これを英語に翻訳して出版するというプロジェクトが、この番組で紹介されました。最初にこの計画を立てたのは、1970 年代に 20 代で渡米し、大陸横を横断して平和の行進をした若者でした。しかし、彼が現地で親しくなったアメリカ人と原爆の話をする、彼らは急に顔を曇らせ「原爆は、戦争を早く終わらせるために必要だったのだ」と主張し、和やかな場の雰囲気はいっぺんに陰悪になり、それ以上話せなくなったといえます。最初の計画は失敗し、返品の山となりました。印刷を引きうてくれる出版社もなくなりかけた。しかし、ただ 1 社だけこれを本に出したいといってくれる会社がありました。利益を度外視して、時代を超えてこの漫画をアメリカ人にも読んでほしい、という思いで本を出すと言ってくれたのです。英語への翻訳について、日本でこれに協力してくれるアメリカ人も与えられました。この漫画は一方的

にアメリカが悪いとは言っていない。戦時中のわが国の軍事政権にも問題があったことを中沢さんは認めている。一方的に、自分たちが正しくアメリカ人が悪いと言っていない。だから、わたしもこの漫画の英語訳に協力したのだと、彼はインタビューで答えていました。こうして、『はだしのゲン』はアメリカの各図書館で徐々に受け入れられ、今や11万部の部数を超える漫画となったといえます。わたしは、後で知ったのですが、昨年、この『はだしのゲン』はアメリカの漫画賞で漫画の殿堂にはいったということです。互いの敵意や偏見を超えて、偽りのない事実を伝えることで、原爆の悲惨さと平和の大切さを訴えるこの漫画が、徐々にアメリカの若い人たちに感動を与える本として受け入れられていった事実を知って、わたしは深い感動を覚えました。

本日お読みいただいたエフェソの信徒への手紙4章25節以下で、パウロはいくつかの勧告をエフェソ教会の信徒に語っています。その中で特に3つのことを申し上げたいと思います。第一は、キリスト者は、あらゆる隣人に対して真実であれということです。金曜日にSさんのお宅を訪問しました。先月召された教会員でいらっしゃいますが、もう一つの葬儀が重なったため参列できませんでした。電話をしても、留守でつながらず、ずっと心を痛めていた。ところが、連絡が取れて、金曜日であれば自宅にいたと言われた。お伺いして、葬儀に参列できなかったことを、深くお詫びしました。すると、ご主人は「自分たちは51年前に初代牧師、鍛冶田牧師の司式のもと、栗ヶ沢教会で結婚式を挙げたんです」といわれました。長く教会を離れていたけれども、納骨式はぜひ教会でやってほしいと言われるのです。最後に、わたしはSさんのために祈りました。すると、祈りの途中でご主人が目には涙を浮かべられたのです。たとえ、中断があろうともかつては教会を支えてくださったお方です。そのことへの感謝と尊敬の念をもって、心を込めて納骨式をさせて頂きたいと思いました。ご主人のお言葉は、本当に嬉しかったです。キリスト者は、真実をもって人と交わることができるのです。

第二は、たとえ怒ることがあっても、その怒りを翌日まで持ち越すなということです。およそ怒ってはならないと聖書は言いません。なぜなら、怒りの中には正しい怒りがあるからです。わがままで、感情にまかせた怒りは避けねばなりません。しかし、神のみ心に反するような不正や不義に対して、わたしたちは怒らなければなりません。怒る力を失ってしまったら、この世の不正は糾されないでしょう。しかし、パウロは憎しみや恨みの念を、翌日まで持ち越すなと言います。他の人と何か問題が起きた時に、それに正しく対処する方法は一つです。「すぐに」対応するということです。争いや分裂を引き延ばしてはならないということです。「江戸っ子は宵越しの金を持た

ない」という言葉がありますが、これになぞらえれば「キリスト者は、宵越しの怒りを持たない」ということになります。そのように心がけましょう。

そして、三番目です。それは「神の聖霊を悲しませない」ということです。神の聖霊とは、わたしたちの信仰の成長を見守る親のようなものです。もし、わたしたちが親の助言を聞かず、失敗や大きな挫折を経験したとしたらどうでしょうか。わたしたちと同じくらい、場合によってはそれ以上に親も悲しむのではないのでしょうか。両親がそうであるなら、神さまも同じです。わたしたちの中に堅固な信仰のモノサシをもって、神さまを悲しませないようにしましょう。神さまを悲しませないためになすべきこと、それは周りの人を悲しませないことです。隣人への奉仕がそのまま神への奉仕になるのです。隣人が喜ぶならなら、神さまも喜ぶのです。

この3つを意識することによって、わたしたちの信仰生活は整えられます。神と人の前に真実に生き、怒りをいつまでも引きずることなく、神さまを悲しませないように心掛けること、これによって、わたしたちは神のみ心に適う新しい生き方ができるのです。

お祈りいたします。